様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２５日現在

機関番号：20101
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20592630
研究課題名（和文） コーチングを応用したマルトリートメント予防子育て支援プログラムと評価に関する研究
研究課題名（英文）Development and evaluation of program for support mother & child care - The program based on coaching skills to prevent maltreatment -
研究代表者
松原　三智子（ MATSUBARA MICHIKO ）
札幌医科大学・保健医療学部・講師
研究者番号：20304115

研究成果の概要（和文）：
本研究は、虐待問題に関わっている専門職に個別インタビューを行う中から、マルトリートメント：不適切な関わり（MT）のアセスメント項目を抽出することと、MT の母親にコーチングを応用した子育て支援プログラムを実施し評価を行うことを目的とした。結果、専門職が捉えていた MT の項目は、母子関係、母親の特性、親のセルフケア能力、家族の課題から構成されていた。中でも特徴的な項目は、母子関係の中で【発達に合わない関わり】【希薄な関わり】【過剰な期待】【子どもと母親の同一化】などであった。また、母親の特性の幾つかは、大人の発達障害の診断基準に類似する項目が含まれており、MT の背景要因の一つとして検討していく必要性が示唆された。また、MT のハイリスク群に対して、コーチングを応用した子育て支援プログラムの試案を作成して実施・評価した。その結果、本プログラムは母親が自身の子育てを内省する機会となっており、子どもとの関り方やコミュニケーションに変化が見られた。

研究成果の概要（英文）：
The objectives of this study are to obtain criteria to assess child maltreatment ; inadequate parenting (MT) from interviews with specialists who deal with MT, and to evaluate a child-rearing program in which coaching was provided for mothers who committed MT. As a result, the criteria to assess MT, which the specialists perceived, consist of the mother and child relationship, the mother's characteristics, the mother's self-care abilities, and family issues. Some significant elements of the mother and child relationship in the MT criteria are that "interaction unsuitable for their children's development", "weak interaction", "excessive expectations", "mothers' inabilities to regard their children as a different person" and so on. and "identification of the mother and child" and so on. Criteria related to the mother's some characteristics include diagnostic criteria of adult developmental disorders. Therefore, the necessity to investigate these characteristics as underlying factor contributing to MT has been suggested. Also, we conducted and evaluated our experimental child-rearing support program which provides coaching for mothers in an MT high-risk group. The findings showed that the program provided mothers with opportunities where they can take a second look at their child-rearing by self-reflection, and we observed changes in the relationship between the mothers and children and their communication with others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：子育て支援，コーチング，プログラム開発，マルトリートメント予防，評価

１．研究開始当初の背景

近年、児童虐待の問題がクローズアップされ、子育てしている母親の支援を行っていくことが重要な課題となっている。平成 17 年の「虐待による死亡事例等の検証結果報告」（厚生労働省，2007）によると約 7 割が 4 歳までに死亡しており、行政で行われている乳幼児健康診査（以下、健診）や予防接種を受診していた割合は 64.3%～88.9%であった。つまり、虐待事例であっても健診などの保健事業に参加している可能性もあり、このような対象が虐待死に至る前に発しているサインを保健師は早期にキャッチし、介入していく必要がある。

現在、虐待のアセスメントツールは幾つか開発されているが、健診などの 1 次・2 次予防の場面では、明らかに虐待と判断できるサインは少なく、既存のツールは使用し辛い現状がある。しかし、本研究で着目したマルトリートメント（不適切な関わり）は、先々虐待に至るかもしれない予備群の対象を早期に発見するための指標となる可能性があり、マルトリートメントの概念を明確にする必要がある。

また、これらのマルトリートメントの対象に対し、コーチングを応用した子育て支援プログラムを作成して介入することで、虐待への移行を予防するための一助につながる可能性がある。本プログラムでは、ビジネス分野や子育て支援において効果をあげているコミュニケーションスキルの 1 つであるコーチングを応用した子育て支援プログラム（試案）を作成し、介入・評価を行う。

２．研究の目的

本研究の目的は、①マルトリートメント（不適切な関わり）のアセスメント項目について明らかにすることと、②マルトリートメントハイリスク群の母親を対象に、コーチングを応用した子育て支援プログラム（試案）を作成し、介入と評価を行うことである。

３．研究の方法

(1) 地域で子育てしている母親のマルトリートメントを発見する為に、マルトリートメントのアセスメント項目を明らかにする。

① 先行研究等からマルトリートメントのアセスメント項目を整理する。

② 子どもの虐待問題等に携わる専門職（医師、福祉職、心理職、保健師、保育士、弁護士など）が捉える母親のマルトリートメント項目を明らかにし、ハイリスクの対象者を精選する一助とする。

(2) コーチングを応用した子育て支援プログラムの作成と実施・評価

① 文献や既存のコーチング等を用いた子育て支援プログラムに参加し、フィールドワークを踏まえて、コーチングを応用した子育て支援プログラムを作成する。

② ①で作成したプログラムを用いて、マルトリートメントのハイリスク群に対して介入を試み、その評価を行う。

４．研究成果

(1) 母親のマルトリートメントの項目を明らかにした。

① 文献におけるマルトリートメントの概念の明確化

文献検討を行い、母親のマルトリートメントの概念は図のとおり、子どもに関わり過ぎる（介入が大きい）虐待と、全く関わらない（介入が小さい）ネグレクトの 2 軸からなっており、一般的な親としての関わりから外れるに連れて、グレーゾーン、イエローゾーン、レッドゾーンへと子どもの危険度が高まっていた。したがって、保健分野で捉えていく必要のあるマルトリートメントの対象は、レッドゾーンはもとより、一般的な関わりから外れたグレーゾーンからイエローゾーンに位置したマルトリートメントを捉えていると言える（この部分の概要については、下記の図書に記載済みである）。

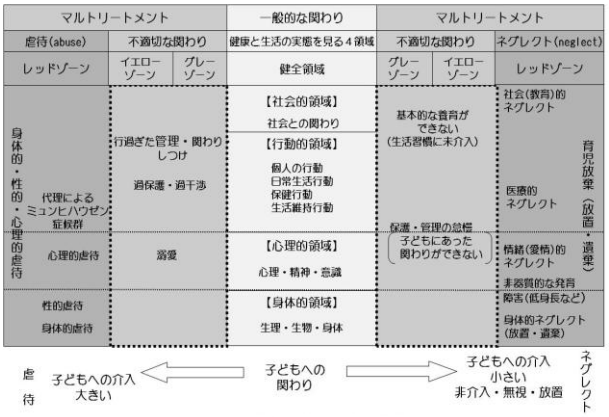

図　マルトリートメントの概念

② 専門職が捉えた母親のマルトリートメントのアセスメント項目の明確化

（ｉ）研究目的：

マルトリートメントのアセスメント項目について明らかにすることである。

（ⅱ）方法

対象：児童養護施設、児童相談所、療育施設、医療施設、法律事務所などで虐待問題に従事している専門職 24 名とした。

データ収集方法：マルトリートメントと考える親の関わりについてインタビューガイドを用いて、1 時間程度の半構造化インタビューを実施した。

マルトリートメントの定義：高橋ら（1995）のグレーゾーンからイエローゾーンとした。

インタビュー内容：対象の性別、職種、対象者が関わってきた経験の中から考える親のマルトリートメントについて事例などをとおして自由に語ってもらった。インタビューは、対象者の同意を得て録音し、逐語録を作成してデータとした。

分析方法：逐語録からマルトリートメントとして語られた文脈を抽出し、類似した内容について整理し分類した。

倫理的配慮：所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施し、対象者には文書と口頭で研究の趣旨、プライバシーの保障、協力への自由参加などを説明し同意を得た。

（ⅲ）結果：

対象の性別は男性 13 名、女性 11 名で、職種は小児科医師 2 名、小児病院や施設等の保健師 3 名、心理職 6 名、福祉職 8 名、保育士 2 名、弁護士 3 名であった。

本研究から専門職が捉えていたマルトリートメントのアセスメント項目は、母子関係、母親の特性、親のセルフケア能力、家族の課題から構成されていた（表 1～4）。

特徴的な項目は、母子関係において、母親が子どもと距離が取れず、私物化するなどの【子どもと母親が同一化している】、親が子どもに能力以上の理想や期待を過剰にもつ【子どもに過剰な期待をする】、親の役割を子どもにさせるなどの【発達に合わない関わりである】、子どもと共有する時間をもてないなどの【希薄な関わりである】、親が自己中心的である／パートナーや他のきょうだいを大切にするなど【子どもの存在を軽視する】であった。

母親の特性では、病気などを抱えている【身体的特性】や、感情や気持ちの起伏が激しい／起伏がない、自信を喪失しているなどの【心理的特性】、一貫性、柔軟性、常識に欠けるなどの【行動的特性】、場の空気が読めない、思考・会話がずれてかみ合わない、相談相手や友達をつくれない、育児協力者がいないなどの【社会的特性】を捉えていた。

親のセルフケア能力には、経済的問題を抱えている、住環境・日常生活が整っていないなどの【生活維持力に課題がある】と、生活習慣が乱れている、育児方法や知識が不十分であるなどの【ヘルスケアや育児が脆弱している】を捉えていた。

家族の課題としては、DV の問題を抱えている、母子家庭・生活保護家庭である、夫婦の協力がないなどの【複雑な家族の問題を抱えている】を捉えていた。

表 1 母子関係

子どもと母親が同一化している	母親が子どもと距離を取れずに、子どもを私物化する
	子どもに経験させずに母親が代替する
子どもに過剰な期待をする	子どもに対して能力以上の過剰な理想や期待をもつ
発達に合わない関わりである	子どもの発達やペースに併せて関われない
	年齢に応じたしつけができない
	親の役割を子どもにさせる
希薄な関わりである	子どもの気持ちが汲み取れない・共感できない
	子どもと共有する時間をもてない
子どもの存在を軽視する	きょうだい間で異なる対応、特定の子どもを阻害する
	子どもにネガティブな感情を表出する
	自己中心的である
	パートナーを優先した関わりや態度を示す

表 2 母親の特性

身体的特性	病気等を抱えている
心理的特性	親の発達障害、反応性愛着障害、反抗挑戦性障害の問題がかぶる
	親の知的な問題がある
	細かく具体的な説明を要する
	感情・気持ちの起伏が激しい
	感情がない・外に現れない
	考え方などが逸脱している
	自信を喪失している
行動的特性	常識に欠ける
	親としての自覚がない
	柔軟性に欠ける
	一貫性に欠ける
	判断や計画性に欠ける
社会的特性	人との距離の取り方が難しい
	人を受入れない
	場の空気が読めない
	相談相手や友達を作れない
	思考・会話がずれてかみ合わない
	育児の協力者がおらず、孤立している

表 3 親のセルフケア能力

生活維持力に課題がある	経済的問題を抱えている
	住環境・日常生活が整っていない
ヘルスケアや育児が脆弱している	生活習慣が乱れている
	育児方法や知識が不十分である
	しつけができない
	ヘルスケア行動がとれない

表 4 家族の課題

複雑な家族の問題を抱えている	DV の問題を抱えている
	母子・生活保護世帯である
	親子関係にひずみがある
	夫の協力がない
	家族の関係が悪い

（ⅳ）考察

専門職が捉えたマルトリートメントのアセスメント項目は、母子関係と共に、母親の特性、親のセルフケア能力、夫婦や家族関係を捉えており、既存の家族生活力量モデルや家族看護アセスメントモデルと類似した項目が見出された。しかし、母子関係におけるマルトリートメントの項目は、発達に合わない関わり、希薄な関わり、過剰な期待などを捉えており、母親が子どもに関わる程度や質が一般性から逸脱したものとして捉えていた。また、子どもの存在を軽視するという項目は、従来、心理的虐待として子どもの視点で捉えていた項目であったが、本研究では親の子どもへの加害性で抽出された。さらに、子どもと母親の同一化、距離がとれないことは、他のアセスメントの中では項目として存在せず、本研究において特徴的なものであったと言える。

最後に、母親の心理的、行動的、社会的特性の内容が、大人の発達障害の診断的特徴と類似していたため、マルトリートメントの背景要因として、今後さらなる検討が必要と言える。

(2) コーチングを応用した子育て支援プログラムについて情報収集を行う

下記のプログラムに参加したり、実践者より報告を聞くことから情報収集を行った。

① Triple P「前向き子育てプログラム」

オーストラリアのサンダース氏が、認知行動療法を用いて開発したプログラムである。対象に応じてレベル 1～5 に分かれており、レベル 4 では、幅広い子育ての問題に対応するプログラムとなっている。DVD を用いて「前向き子育てプログラム」の考え方と子育て技術を学び、グループで 5 回のセッションを受け、毎回子育ての課題を実践しながら、子育ての技術を学ぶ。セッション途中で 3 回にわたり電話で個別セッションをファシリテーターから受け、個別の課題に取り組む。評価表も作成されおり、システム化されたプログラムで、ファシリテーターは資格を取得する必要がある。世界 15 ヵ国以上で使用されている（このプログラムの概要については、下記の図書に記載済みである）。

② コモンセンス・ペアレンティング（CSP＝Common Sense Parenting）

米国ネブラスカ州の児童養護施設の取り組みをもとに開発された、行動療法に基づく虐待防止プログラムで、子どもとのコミュニケーションのとり方やしつけの方法を、具体的でわかりやすい事例を通して、繰り返し学習するプログラムとなっている。ファシリテーターは資格を取得する必要がある。

③ “Nobody’s Perfect”（ＮＰ）

カナダで開発された子育て中の親支援プログラムで、0～5 歳までの子どもをもつ親を対象とし、参加者がそれぞれに抱えている悩みや関心のあることをグループで出し合って話し合う。子どものマネジメントスキル訓練、認知再構成と問題解決訓練、ストレスマネジメントと怒りのコントロール訓練など、必要に応じてテキストを参照しながら、自分にあった子育ての仕方を学んでいく。ファシリテーターは資格を取得する必要がある。

④ ママのイキイキ応援プログラム（通称ママイキ）

山﨑洋実氏がコーチングの手法をベースに、自身の子育て経験や日常生活の具体例を交えて、子育て中の母親がすぐに実践できるよう工夫された講座である。講座を修了した先輩ママが次回の企画を行う等、参加者同士のつながりを維持しながら、その地域で講座を継続的につなげている特徴がある。

(3) プログラム（試案）の作成と、介入および効果測定

上記を踏まえて、子育て支援プログラムを作成して介入・評価を試みた。

① 本研究の目的

児童デイサービスを利用している子どもをもつ母親に対して、コーチングスキルを用いたプログラムを実施することで、その効果や課題を検討することである。これらを行うことで、親子関係の安定性を保ち、孤立を予防することが可能となり、マルトリートメントを予防するための一助につながることが期待できる。

② 研究方法

対象：A 市の B 児童デイサービスを利用している子どもをもつ母親 12 名であった。

プログラム概要：合計 9 回のプログラムを実施した（表 5）。1 回 2 時間のコーチングスキルの説明（「コーチングの基本的な考え方」、「聴く」、「承認」、「質問」、「提案」等）と、それを用いた演習（2～3 人のグループでこれらのスキルを用いて話し合う形式）で、概ね月 1 回、計 5 回実施した。その後、参加者からの希望で継続的に、育児の悩み等を母親同士がコーチングを用いて話し合う形式で月 1 回、計 4 回実施した。毎回、参加終了時に気づきや感想を発言してもらった。

評価方法：9 回目の研修会終了時にアンケートを実施し、欠席者については、デイサービス参加時に施設担当者より手渡しをしてもらい、郵送で個別に回収を行った。

分析方法：回収された 10 人分のアンケートの自由記載をデータとし、効果についてまとめ、今後の課題について検討した。

倫理的配慮：所属機関の倫理委員会の承認を得て実施し、児童デイサービスの責任者および参加者に対して、研究の趣旨を文書と

口頭で説明し同意を得て実施した。

表５　実施したプログラムと参加人数

回数	月	参加人数	内容
1 回目	8 月	12 名	コーチングの基本的な考え方 聴く
2 回目	9 月	11 名	承認
3 回目	9 月	12 名	質問 提案
4 回目	10 月	11 名	コミュニケーションのタイプ 区別
5 回目	11 月	10 名	ミッションステートメントの作成
6 回目	12 月	5 名	学んだコーチングスキルを用いて， コミュニケーションを行おう
7 回目	1 月	4 名	子どもの特性（強み・弱み）と対処
8 回目	2 月	5 名	子育ての悩みと対処
9 回目	3 月	3 名	今後の保護者会の活動

③ 結果

本研究プログラムは、母親に４つの効果を示していたが、子どもの発達上の課題から実践の難しさを感じている母親もいた（表 6）。

表６　プログラムの効果と課題

効果と課題	アンケート内容
自分自身への気づき	●日頃子育てや自分自身の事について改めて考えるきっかけとなり、いつも何かしらの気づきがあり、気持ちを新たにすることができた。 ●子どものことを中心に考え過ぎていた自分に気づき、将来の自分自身のことも考える余裕をもつことが必要だと思えた。 ●会話の大切さはもちろん、自分自身の育児を振り返る事ができた。 ●普段の子育てや子どもへの関わり方を考える機会になり、自分の不安な気持ちに気付いたり、不安を解消する機会になった。 ●普段、子どもをほめていない自分に気付いた。 ●話をすることで自分を振り返る機会となり、1か月イライラせずに済んだ。 ●子どもの気持ちを認めず自分の枠に当てはめようとしていたことに気付いた。 ●他の人から色々な質問をされて新たな気付きがあった。 ●他の人と話をすることで，色々な人の考え方があることに気付いた。
気持ちの充実	●毎回、充実した気持ちになり“心の充電”ができた。 ●自分の経験を話すことで、気持ちが楽になったり考え方を変えたりできるようになった気がする 。また，気持ちを発散することができた。 ●夫以外の人と話すことがない日も多い中で、研修会を通して前向きな気持ちになれた。 ●他のお母さん達の経験や悩みを聞いて自分の考えと同じだったりすると気持ちがリセットされた。 ●私の話しに対して、皆が聴いてくださったこと／話せたことが本当に嬉しかった・学びになった。
コミュニケーションの変化	●保護者同士がお話する機会がなかったので、これからも続けたいと思った。 ●相手の気持ちになって話すことを意識するようになった。 ●問題について考え、答えを導きだすことができるようになった。 ●他の家族や人との関係に使えるし、確実な穏やかな関係性を築けている気がする。
子どもとの関わり方の変化	●健常の子どもでも、障害がある子どもでも、子育てに必勝法というものはなく、コーチングなどのちょっとしたことの積み重ねが大事なのだと感じた。 ●子どもと日々過ごす中で、自分の都合や感情に流されることがないように子どもの立場で考えるようになった。 ●子どもの言動に対して感情的にならず、向き合う大切さを学んだ。 ●子どものできないことにばかり目が行っていたが、できることに目を向けることで気持ちが明るくなれた。 ●コミュニケーションを取りづらく感じていたが、コーチングを知って子どもと向き合えるようになった。 ●子どもと視線を合わせるだけでも、子どもが落ち着き、コミュニケーションを取れる実感をもつことができた。 ●子どもに色々な体験をさせる過程を重視して、こどものペースに合わせられるようになった。 ●子どもの気持ちに寄り添うようになり、子どもと一緒に考えられるようになった。
実践の難しさ	◆実践やその結果は本当に少しずつで、今は時間の余裕がなく、実践はまだ先かもしれない。 ◆コーチングスキルを生かせているかどうか自信がない。 ◆コーチングは難しく、頭ではわかっているつもりでも、実際に使うことは難しく、ちょっとずつ使うことが重要だと思った。 ◆参加することでこうしなくてはならない、こうした方が良いと考えてしまい、自己嫌悪に陥ることも多かった。 ◆期待どおりの子どもの反応が得られずに落ち込んだ。

④ 考察：

本研究のコーチングスキルを用いた子育て支援プログラムは、母親が前向きな気持ちになれる、気持ちの発散や充電の場になっており、「気持ちの充実」につながっていたと言える。また、「自分自身への気づき」で、自分を内省し、育児を見直す機会になっており、イライラや不安解消につながっていたと考えられる。更に、「コミュニケーションの変化」「子どもとの関わり方の変化」がみられたことから、コーチングというコミュニケーションスキルを用いたことで、日常的な人間関係にも使用でき、コミュニケーションに変化を与えていたと考えられる。したがって、対人関係や親子関係の安定につながる有効性が期待できると言える。

今後の課題は、指標等を用いてストレスの軽減効果や、自己効力感の変化などについても確認していくことと、プログラムにおける企画、プロセス評価についても検討していく必要がある。また、対象者の中には子どもの発達上の課題があり「実践のむずかしさ」を感じていたことから、対象によっては個別にサポートするプログラムの検討も視野に入れて関わる必要性が示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　3 件）

① 松原三智子，和泉比佐子，岡本玲子：コーチングスキルを用いたマルトリートメント予防のためのプログラムの効果と課題，日本子ども虐待防止学会（第 17 回学術集会），2011.12.3，茨城

② 松原三智子，和泉比佐子，岡本玲子：福祉・医療分野の専門職がとらえた親のマルトリートメント（不適切な関わり），日本子ども虐待防止学会（第 16 回学術集会），2010.11.28，熊本

③ 松原三智子，和泉比佐子，岡本玲子：福祉分野の専門職がとらえた親のマルトリートメント（不適切な関わり），日本公衆衛生学会（第 68 回日本公衆衛生学会総会），2009.10.23，奈良

〔図書〕（計　1 件）

① 松原三智子編著：真興交易（株）医書出版部，養育支援に役立つコーチングサポート　子どもの虐待を防ぐマルトリートメントの発見，2009，pp10-26，pp206-213

６．研究組織

(1)研究代表者

松原　三智子（MATSUBARA MICHIKO ）
札幌医科大学・保健医療学部・講師
研究者番号：20304115

(2)研究分担者

和泉　比佐子（IZUMI HISAKO）
札幌医科大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：60295368

岡本　玲子（OKAMOTO REIKO）
岡山大学大学院・保健学研究科・教授
研究者番号：60269850